

平成 18 年 5 月 16 日

(社)関西経済連合会
文化・観光委員会
委員長 山下和彦

文化審議会文化政策部会

20 世紀は前半の富国強兵策や戦争による忌まわしい経過を辿ったものの、後半になると経済成長の歯車が見事に回転して結果的には光り輝く世紀となった。

ただその光の部分が歴史上空前のボリュームとなったことで、反面影の部分も実に深刻な悩みとなってしまった。

その深刻な悩みの代表格が「人間性の崩壊」と「環境破壊」「自然破壊」である。21 世紀はこの 20 世紀のツケを早急に解決しなければならない課題に迫られているのである。産官学あげてこの問題の早期解決に取り組んでおり、少々スピード感に欠けるうらみはあるものの、それなりの成果が期待できる様な雰囲気は整いつつある。

然し、実は驚くべきことに、国を挙げての対応スピードより顕著な動きを示しつつあるものが、国民の消費行動の中に見て取れる。それは GDP の 60%強を占める消費実体が 95 年を境として驚くほどその変貌を見せていることである。具体的には 94 年までには消費の過半数が「物」であったものが、95 年よりこれが「非物」にとって変わってしまったことである。「非物」の代表格四本柱は

- ① 医療、介護、保険、スポーツなどの健康産業
- ② 情報通信産業
- ③ 色んな領域の芸術産業
- ④ 観光乃至、それにまつわる観光産業

がそれであり、悩みの種である二つの大きな影の部分の決裁に有効な産業群である。

おそらくこれ等の産業群の中から 21 世紀の我が国産業の担うリーディング産業が輩出するであろう事は大方の予測である。

この消費動向の変化は、人間の持つ本能的叡智によるものか、或いは見えざる神の手によるものかとも思われるが、21 世紀経営の重要な処方箋と見てよいのではなかろうか。そしてこの 4 つの群のいずれにも共通的キーワードが「文化」であることもまた、重要な示唆に富んでいる。以下各々の群ごとにそのキーワード「文化」と群との関わりを解析してみたい。

① 健康産業と文化

人々が先ず第一に求めて止まぬものは、健康と長寿である。

健康は心身ともに健やかに日常を経過することであり、まず身丈に合ったところで体の日常的なエクササイズが行われることと、穏やかに心平らに生きられる事である。高速道路でジョギングする者はいない。

できれば安全快適で、身も心も爽やかに散策できるような場を色々な自治体が競って提供してもらいたい。隣の人顔も知らない人々が、こんな場で挨拶を交わす情景を想像してみたい。

旅も心の癒しに大事です。気軽にこれを楽しめる様な目配りの効いたインフラの整備を益々進めたいものです。

不幸にして病を得たり、極端な終末医療に臨む人々にとっても可能な限り心穏やかに過ごせる施設であってほしい。それこそ「文化」である。

見るスポーツも心の興奮と感動に欠かせない WTO の定義によるとビッグなスポーツイベントはツーリズムの四大要素の一つである。経済効果も大なるものがある上、大いなる国際交流の場でもある。仕掛けは官民あげて今以上に積極的に進めねばならない。

② 情報通信産業

文化発信の大きな原動力の一つであるグローバルな発信力も強化せねばならない。いくつかある国立劇場は言わば宮廷文化の粋ともいえるが、情報通信産業から発せられる芸術文化は西鶴や近松の庶民文化でもある。文化活動の裾野を広げる役割は実に大きい。

ただ裾野が広いだけに、以前より問題となっている日本語の乱れや風俗、社会の諸々の問題に十分なチェックは必要である。

放送の場合、放送三法にこれ等問題点を如何に具体的に入れ込むかも重要なポイントとなる。更に問題となる点は、通信と放送の融合以来なだれの様に参入している通信の放送もどきに対する参入である。

インターネットや最近の携帯電話通信には恐るべき不正不法行為がはびこっており、今や大きな社会問題ともなっている。もともとこの分野には2000年の I.T 基本法は存在するものの、網目が粗くとても的確に対応できているとは言えない。更なる法整備が急がれるところであり、この法整備と表裏の関係にあるチェック機能の充実も急を要するテーマである。

マスコミはまだしもチェックしやすいが、新しい放送もどき活動は情報の集積量も膨大で匿名性も高く、且つ廉価であるところから、それらをマンパワーだけで処理することは殆ど不可能である。

I.T 技術をフル活用した新しいフィルターの開発が望まれるところである。

③ 芸術産業

まさに文化活動の中心であるが、昔から文化には金が掛かかるといふ諺どおり、官民の支援活動が欠かせない。

国も支援活動には積極性がみられるが、ここにはポリシーの継続性とガバナリティが重要である。

私の文部大臣はアンドレ・マルロー（注）以下政局とは独立してかなり長期にわたり存在している事は参考にしなければならないし、関西において平成15年より始められた文化庁による関西元気文化圏構想（河合長官提唱）が継続的なパワーで、少しずつ良い芽を出しているのも参考にしなければならない。

また、活力のボルテージを上げてゆくためにも民間の企業及び個人の協力が欠かせない。私のメセナ活動やアメリカの税制度などを横目に見ながら参入しやすい制度を検討すべきである。

④ 観光産業

その名の通り、光を見る産業といえる。

言い換えれば、文化を愛でるといふことであろうか。我が国には世界に類を見ない様な恵まれた自然と歴史文化、それに育まれた美味しい食べ物があり、ストックには十分恵まれている。残念ながら出入りの観光収支差額は目下3兆円の赤字と目されており、国の国際収支全体から見ると、この赤字は早急に解決すべき経済的なテーマである。我が国内閣始まって以来、初めて小泉内閣が観光立国宣言を2003年に発したのもその所以である。我が国を訪れる人にとっては先ず安全、安心であることがベースになければならないが、その点では他国との関係では比較的優位にあることは、有難く、この点を更に強化しなければならない。

次に、類稀な自然である一説によると、日本ほど素晴らしい四季に恵まれた国は世界人口64億のうち1割にも満たないという。

名著「犬と鬼」を書いたアレックス・カーの指摘する通り、メダカも棲めない様なコンクリート製の川を造ったり、素晴らしい海岸線を53%もテトラポットで埋め立ててみたりする愚は避けなければならず、どう一段とドレスアップするかにとりかからねばならない。

歴史、文化遺産も大事なストックである。ユネスコとも協力して、文化を愛でるテーマとしなければならない。金太郎飴の様な売店づくりも再検討の時期である。都市の魅力も欠かせぬものである。

それこそ、美味しい食べ物、おしゃれな町並み、ショッピングの楽しめる街、エンターテイメントがそこそこに埋設された都市づくりも又、大いなる文化性のアピールである。

以上、諸々の要因を消費動向の大変革という視点で「文化」との関わりを解析してみたが、金のかかるこの作業に国、及び民間が協力し易くなる様な諸制度と共に、協力者に対する経済的以外のインセンティブも用意せねばならない。文化勲章、文化功労賞などとともに文化推進功労賞といったようなものが、草の根活動にも光が当たる様にもなれば、と考える次第である。

おわりに「扉」というものは、外から開いたのでは「扉」の役に立たない。須らく内側から開けてもらうものである。

今までの歴史は嫌がる「扉」を常に外からこじあけてきた歴史であるが、P.ドラッカーの言う断絶の時代では改めて扉の原点に戻って内側から明けてもらえるような細工・工夫しなければならない。

魅力的な仕掛けが望まれる所以である。

(注) Andre' Malraux

1945－1946 仏臨時政府 情報相

1958－1960 シャル・トゝ・ゴール政権 情報相

1960－1969 " 文化相